

『能・リア王』について

On Noh: King Lear

岡本 靖正

OKAMOTO Yasumasa

Abstract: Of all Shakespearean Noh plays so far written and directed by Kuniyoshi (Munakata) UEDA, *Noh: King Lear* is the best as a Noh play. The main reason is Act Five was successfully and most beautifully made into “*fukushiki*” or dual world style of Noh, with the ghost of Cordelia appearing to save her dying father as if to bring him into Heaven. Both *shite* (Madam Reiko ADACHI as Cordelia) and *tsure* (Yoshihisa ENDOU as King Lear) performed very fine. Expected to be repeated by other performers also.

Keywords: *Noh: King Lear*, Shakespearean Noh plays, Kuniyoshi (Munakata) UEDA

『能・リア王』、能シェイクスピア、上田（宗片）邦義

上田邦義氏の新作『能・リア王』（足立禮子・鈴木啓吾 作補）は、これまでの氏の能シェイクスピアの中で、一曲の能として最もすぐれた作品になったのではないかと、というのが第一の感想である。シェイクスピアの世界が、しっくりと能の様式になじんでいると感じられた。

成功の大きな理由は、『リア王』の終幕を複式能に構成し、シテをリアではなく、コーディーリアとしたことにあるように思われる。リアがコーディーリアの亡骸（唐織）を抱いて登場し、コーディーリアを失った悲しみを謡うところから後場を始め、「コーディーリアの、唇動きて何か言いたるぞ、何言いたるや、コーディーリア…」と言いつつ（地謡）、リアも事切れる。コーディーリアの霊が現れ、「父上の御霊も鎮まりて、こなたへ来たり給えや」とリアを導き、シテの早舞はやがてリアとの相舞となって、連れ立って彼岸に向かう。霊となったシテ（足立禮子）の姿は美しく、相舞となるとき、リアのよれ狩衣が脱げ落ちて白狩衣姿に変わるのも印象的であった。原作にはもちろんないキリを大胆に取り込んだ、この後場の構想が出来上がったときに、『リア王』の能化が完成したのではないかと。

前場は、原作の第四幕第三場および第六場（「オックスフォード・シェイクスピア」一冊

本全集の幕場割による)の台詞を詞章としているが、原テキストは解体されて、自在に綴り合わされ、リアが登場するところでは、第一幕や第三幕第二場の嵐の場の台詞が織り込まれる。地謡の使い方も一段と巧妙かつ自然になっている。大きな杖を手にしたリア(遠藤喜久)が、橋掛りで「汝ら天の神々よ、あの娘どもを唆し、父に背かせたるが汝らならば、この吾には神の義憤を起こさしめ、我を忍耐の鑑たらしめよ」と謡い出すとき、その丈高きリアの存在感は見事であった。原作を踏まえつつ、作者が創作した詞章も少なくない。このくだりも、「忍耐の鑑」(the pattern of all patience)は原テキストにあるが、全体は作者の創作と思われる。

おそらくまだ手を入れる余地もあるであろう。コーディーリアの侍女はどこか落ち着きが悪かったし、リアとコーディーリアを牢に引き立てるアイ(隊長)の登場にもいささか唐突感があった。そして中入となって、狂言間語を道化が語る。道化(Fool)はいかにもその役に適任と見えるが、実際には、その言葉は『リア王』の道化らしからぬもののよう聞こえた。台本としては、言う／言ふ、給え／給へ、思う／思ふ、等の送り仮名が揺れているのも気になる。

しかし全体として見れば、『能・リア王』は、現代の新作能として、今後多くの演者によって演じられる古典的な演目の一つとなりうる作品ではないか。ぜひそうなってほしいと願っている。